

非暴力直接行動と鶴見俊輔

土 倉 莞 爾

目 次

- I はじめに
- II 非暴力直接行動とは何だったのか
- III 小田実とのつながり
- IV 韓国慰安婦問題と鶴見俊輔
- V おわりに

I はじめに

鶴見俊輔とは何者かと考えたときに、思い浮かぶことは、「行動する知識人」という発想である。彼自身、どこかで、自分は著述よりも行動の方が大切だというようなことを述べていた記憶が、筆者（土倉）にはある。本稿はそのような問題意識に立って、鶴見俊輔の思想と行動を論じてみようとするものである。

II 非暴力直接行動とは何だったのか

鶴見俊輔は、1981年、『遠い記憶としてではなく、今—安保拒否百人委員会の10年』に、次のように書いた。「すわりこみ、断食は、私にとって何だったかと、考える。（中略）とくに、最初に米国大使館前にすわったことが、心のこっている。その直前までは、そんなことは自分にはできないような気がしていたので、自分の人生がそこで二つに分れたような気がした」（鶴見 1981, 3: 同 2017, 122）。

鶴見の場合、「すわりこみ」や「断食」は大きな意味を持っているように思われる。誤解を恐れずに言えば、思想的なものがある。彼の思いを続けて引用しよう。彼はこう書いている。

自分を無力な状態にして、権力に対して抗議するのは、無駄なようにも思え、矛盾を含んでいるようにも思える。たしかにそうだ。他にもっと有効な抗議の仕方をさがさなくてはならない。それにしても、他の有効な方法が、地位を利用することであったり、有名人を利用することであったりすると、批判する相手の国家権力はもっと金があり、大きな組織があり、もっと地位と名声をもっているのです。こちら側の有効性をうわまわる有効性をいつも、むこうがもっており、抗議することは無駄というふうにも考えられる。(中略) 1960年の安保反対運動の時には30代、65年のベトナム戦争反対運動のはじまりには40代、そして今、1981年には50代の終りで、からだけ相当におとろえた。もはやジグザグデモはできない。断食とすわりこみがようようのこと。(中略) そんなふうで、私(鶴見)は、著作をとおして、自分の考え方を発展させることがすすんではないないけれども、15年前のすわりはじめの初心にもとづいて政治活動をしている。

10数年前にすわりこみで出会い、このごろ会っていない人たちのことをよく考える。

なくなった柴田道子さんのこと。

三里塚の松浦(小泉)英政夫妻のこと。

2年ほど前に、松藤豊氏から、自由民権運動の郷土史をもらい、1年ほど前に、ガリ版通信をもらって、うれしかった。

すわりこみは、それぞれの人の中に、生きつづけている(同、123-5)。

以上であるが、ここで、柴田道子、松浦(小泉)英政夫妻、について、筆者なりにフォローしておきたい。まず、柴田道子であるが、鶴見は、柴田が「戦争が生んだ子供たち」と題して『思想の科学』1959年8月号に書いた文章の中から、次のセンテンスを引用している。ここに再引用しておきたい。

「すべての人に、自分の生れた国があるのと同様に、それぞれの人間には、幼年期とか少年期とかの広大なふるさとがある。どの人もそこから出てきた。そうした私のふるさと、それは太平洋戦争だった。私はそこ(戦争)から生きるためのエネルギーを引き出し、あるいは転化させて来ている」(鶴見 2002、

118)。

柴田の小学5年生から6年生までの生活について、鶴見は次のように描く。鶴見の史観がよく出ている箇所である。鶴見によれば、皇国少女として柴田道子が自分をつくってゆこうとする5年生から6年生まで1年半の努力。その中で、美しいものにされてゆく父母とのかつての生活。だが、努力にもかかわらず、学童疎開の体験を彼女は美しいものにかえて記憶にとどめることはできない。とくに消すことができないのは大人の裏切りである。敗戦後に教師は手のひらをかえすように、軍国主義から民主主義にかわってゆく。それはこの裏切りの記憶に仕上げをした。大人の裏切りの主題は、彼女の記憶に焼きつけられた(同, 119)。

引用が長くなるのだが、鶴見の次のような感動的なエピソードの記述が印象的である。鶴見によれば、柴田道子と鶴見とが会ってから3年ほどして、1960年の安保改定闘争があった。「羽田への道はせまい」という合言葉で、学生たちを羽田空港にあつめた全学連の活動は名高い(1960年6月10日)。鶴見によれば、そのとき、全学連がそこよりどころをもつとは思えない共立女子大学から、柴田道子が一人参加していたことは、あとで知って意外だった。彼女なりに、学童疎開の記憶が、羽田への道とむすびついていた、と鶴見は書く(119-20)。

1960年6月15日、学生たちの2度目の国会突入の中で、東大大学院生、樺美智子が死んだ。この時にわずかな数に過ぎなかった「共産主義者同盟(ブント)」が33万人(6月18日)を国会周辺までひきだした。こう書いて、鶴見は、1960年5月～6月から41年たった今、鶴見はこの抗議がなかったら、どうだったろうと思う。1941年には民衆への相談なしに日米開戦があり、1945年には降伏、そして1960年には日米軍事同盟の受け入れが、もし抗議なくこのときまっすぐに進んだとしたら、日本人と日本国家はどういう関係の歴史だったのか。ここに民衆の意思表示があったということが、うれしい。まぎれようもなくその中心にいた学生たちを、鶴見はほこらしく思う。樺美智子さんの命日、6月15日になると、鶴見たちの仲間、国会通用門前にあつまって、花を置く。柴

田道子は、樺美智子とおなじようにまっすぐに道を歩いた(120-1)。

いかにも鶴見の思想と人柄を感じさせる回想である。と同時に次のように書くことの伏線になっている。すなわち、鶴見はこう書く。

(柴田の著書)『谷間の底から』(柴田, 1976)の読者から作者へ手紙が来た。その中に、未開放部落の少女からの手紙もあって、柴田道子は文通をつづけるうちに、読者の信頼を得て、仲間とも通信を重ねることになった。やがて、柴田のつれあいが長野県に転勤してから、柴田は読者のくらしについても知ることになり、『被差別部落の伝承と生活——信州の部落／古老の聞き書き』(三一書房, 1972年)を書いた。(中略)1963年5月1日に、狭山事件とよばれる女子高生誘拐事件がおきて、未開放部落出身の石川一雄さんがうたがいをかけられると、柴田はその冤罪を証明する活動に入り、物証の実験のために穴に入ったりした。その活動の中で、持病のぜんそくの発作がおきて死んだ。41歳だった(121-6)。

次に、小泉(松浦)英政について、これには、黒川創の聞き書きから、かいつまんで引用しよう。

黒川 小泉英政さんは、1948年生まれ。現在も千葉県の三里塚で、無農薬のお百姓さんを現役でやっておられます。(中略)まずは、お生まれから鶴見さんと会おうまでの経緯を簡単にうかがえますか？

小泉 生まれたのは、北海道の赤平というところです(小泉ほか 2017, 13)。

小泉 高校に入って「倫理社会」の授業で、実存主義を知った。ニーチェとか、サルトルとか。(中略)そのころベトナム戦争が始まって、実存主義とベトナム戦争が重なった。本屋に行って『世界』なんかを手にとると、ベトナムからの報道写真が出ていて、僧侶が焼身自殺する写真とか、戦争の悲惨な姿が映し出されていて。

黒川 赤平で？

小泉 うん。赤平って、けっこう、炭鉱の組合運動なんかも盛んだったところだから。(中略)自分では本を買えなかったから、図書館にあった『実存主義事典』を、授業を聞かないで丸写ししたりしてね。(中略)『世界』に、小

田実が、日本人も加害者なんだと書いていた。日本に米軍基地があって、そこからベトナムに向けて爆撃機が飛び立っている。(中略) そのころは、ちょうど小田実がベ平連を組織し始めたところで、早く高校を出たかった。(中略) 文芸部にいたので、文芸部の雑誌に「ベトナム戦争に反対しよう」って文章を書いた(同, 17-8)。

小泉 高校を卒業して、文芸部の友だちと一緒に東京に来た。彼は大学に入るために来たけど、僕はその気はなかった。2人とも『毎日新聞』の奨学生として、販売店に就職した(同, 19)。

小泉 まずは、何回か、デモに参加した。ベ平連のデモって、多いときでも100人か、200人のデモだよ。色とりどりの旗が立って、明るい感じの。

黒川 それは清水谷公園が出発地点の定例デモ？

小泉 そう。自由な感じで、思い思いの面白いデモだったけど、それを繰り返していてもなんか世の中変わるとも思えなくて。(中略) 逮捕覚悟の非暴力の座り込みは、求めていたものだった。で、僕が最初に参加したのは、1967年10月7日、佐藤栄作首相の南ベトナム訪問に抗議して、官邸前で座り込みするという、このときに初めて加わったと思うんです。

黒川 そこで鶴見さんに最初に会う？

小泉 そうです。それが最初だと思う(20-1)。

小泉 座り込むと、機動隊員から腕を取られたり、抱え上げられたりして、その場から排除される。あのとき、どこまで排除されたのか覚えていないな…。とにかく、あのときは、10月7日にそうやって座り込んで排除されて、その後、打ち合わせして、翌日の10月8日に羽田での座り込みの計画を立てた。それは、京大生だった山崎博昭君が虐殺された日になった。僕たちはその日は座り込みに失敗して、羽田から道路沿いを歩いて帰るときに、川を挟んだ向こう側で、全学連と機動隊がぶつかっていた。その光景を川越しにみながら帰ったという記憶がある。

黒川 1966年10月8日というのは、佐藤首相が南ベトナムに飛ぶ当日なんですね。当時のベ平連の関谷滋さんにうかがったところでは、その日、鶴見さん

たち10人ほどが羽田空港に出むいて座り込みによって南ベトナム訪問の阻止行動をするという話で、それで首尾良く全員が逮捕されたら、連絡がつかなくなってしまうので、現場での見届け役として来てくれと言われて出かけた、と(笑)。でも、佐藤首相の乗った車が、直前にコースを変えたらしくて、空振りに終わったということでした。

小泉 いや、タイミング良く座り込む機会をちょっと逸しちゃった、ってことだったんだと思う。(中略) その日は、鶴見さんとか、柴田道子さん、座り込む側が10人前後だとすれば、見る人も10人以上いたと思う。(後略)。

黒川 鶴見さんの、10月8日当日の回想を記した「大臣の民主主義と由比忠之進」という文章のくだりを見ると、京大生の山崎博昭さんが轢かれたらしい現場を、遠くから見ている。そこに、小泉さんたちもいるんですか？

小泉 そうですね。

黒川 いままでいうとどの辺りなんですか？

小泉 弁天橋っていったと思う。

黒川 もうその時分に川上さんとは知りあっているんですか？

小泉 川上さんとは、デモとか、事務所とかで知りあっていると思う。関谷さんもそうだし、吉岡忍さん、山口文憲さん、室謙二さんとかもそう。

黒川 関谷さんもそのころ、ベ平連に出入りするようになってから、わずか2カ月ぐらいだとおっしゃっていました。

小泉 鈴木正穂さんもいたのかな。みんないたんですよ(24-6)。

黒川 1967年11月12日、佐藤首相らの訪米に反対して、小泉さん、川上さんたち11人は、羽田空港前の道路に座り込んで、全員が逮捕された。男性8人、女性3人の若者たちです。この年の前月10月8日に、佐藤首相が南ベトナム訪問することに対して大きな反対行動が取られたのが「第1次羽田闘争」。そして、この日、11月12日、佐藤首相の訪米に反対して取られた反対行動が「第2次羽田闘争」とも呼ばれています。前回の10月8日、「第1次羽田闘争」の折に、デモ参加者の山崎博昭という京大生が、機動隊との衝突のなか命を奪われた。(中略)のみならず、この前日の11月11日夕刻には、由比忠

之進さんという老エスペランティストが、首相官邸前で抗議の焼身をしておられる(29-30)。

ここで、黒川による小泉からの聞き書きからいったん離れて、由比忠之進の焼身自殺の問題を考えてみたい。すなわち、焼身の問題と、坐りこみの問題は、どのようにつながるのか？ 鶴見はこう書いている。

大正時代は、大正天皇の即位とともに始まったのではなく、日露戦争の終わった明治38年にはじまり、大正15年にとじたのではなくて、満州事変のはじまった昭和6年にとじたという説に私(鶴見)は賛成するのだが、このようにひろくとらえられた大正時代の文化の構成要素として、日本のエスペラント語の運動がある。由比忠之進氏は、この大正文化の理想をかかげて長い生涯を生きた人だと思う。由比氏のなくなれる前夜、花をもって虎の門病院に行くと、病室の前に、エスペラントの仲間が集ってすわっていた。ひとり今年同志社を出た青年で、毎週、エスペラントの集会で会っていたと話してくれた。由比氏は東京工大出身の技術者で満州での会社重役生活をへて、隠退。そのあとは、青年たちとエスペラントの集会をとおして、平和運動をしてきた人である。技術とエスペラントと平和運動、この3者の結びつきは、党派精神にとらわれないインタナショナルイズムをあらわしている。このおおらかな姿勢が73歳の由比氏を戦後世代に結びつけたのであろう。同時に、佐藤首相に「閣下」と呼びかけて抗議する姿勢は、まぎれようもなく明治うまれの大正人のそれである。由比氏の抗議の文章は、首相に対する礼節を失うことなく、同時に、ベトナム戦争協力と沖縄基地の放置について、妥協なしの非難をのべている。抗議の表現は、自分を焼くことだった(鶴見 1967, 18)。

以上、由比に関する鶴見言説を長々と引用してきたのであるが、さきに筆者(土倉)が自らに提起した設問、「焼身の問題と、坐りこみの問題は、どのようにつながるのか？」に答えるとすれば、それは「党派精神にとらわれないインタナショナルイズム」という「おおらかな姿勢」であるとしたい。たしかに、「焼身」がなぜ「おおらかな姿勢」といえるのかという反論があると思うが、そこは象徴的問題として考えていただきたい。と同時に付言したいのであるが、

ふと、鶴見は由比に自分自身を投影しているのではないかと、と筆者は鶴見の筆致から連想したのである。

さて、1966年6月29日、米軍機が、北ベトナムの首都ハノイならびにハイフォン地区という都市部に、初めての爆撃を拡大した。翌30日、これにただちに抗議して、鶴見俊輔、市井三郎、いいだもも、渡辺一衛、大野明男ら「非暴力反戦行動委員会」を名乗る人々が、アメリカ大使館前で2回にわたって坐り込みを行ない、警官隊に排除された。午後2時から行なった1回目の坐り込みの参加者は、30人、午後6時からの2回目の参加者は52人だった。その翌日の7月1日にも、さらに「非暴力反戦行動委員会」の41人がアメリカ大使館前で3度目の坐り込みを行ない、また警官隊が彼らを排除した。「非暴力反戦行動委員会」というのは、緊急の必要が生じたときには、逮捕されることも覚悟して直接行動を取るという、ベ平連から集まった小グループである（黒川 2018, 359-60）。

川上賢一もこの小グループの一人であった。川上は、羽田におけるデモで裁判にかけられ、鶴見は「特別弁護」人として出廷する。

弁護人 被告の羽田における行動について、先生はどのようにお考えになりますか。

鶴見証人 私が川上君とほとんど同じ思想、同じような条件があったなら、同じ行動をとったと思います。これは非暴力直接行動ですが、それを通して戦争反対の意志を表現する思想です。これはマルクス主義とか、プラトン主義とかいう思想の体系をなすものでなくて、まさに川上君のとった行動です。ある状況のなかで生きた行動の思想、例えば、アメリカのデイヴィッド・ソロー、イギリス帝国主義に反対したガンジー、また現代のアメリカのベトナム戦争政策に反対するストートン・リンド等のクエーカー教徒も同じであり、一つの国際的運動であります。この考えからみて、川上君の行動は、当たり前前の行動で異常ではありません。（中略）。

川上君の行動は道路交通法違反で訴えられています、これは一般に、羽田空港への道を行く人の通行をさまたげたということです。川上君の行動は

こういう性格のものではありません。川上君の行動は、首相の米国訪問を妨げるといふ一つの目的だけに捧げられたもので、そのように計画され実行されたものです。(中略)。

言いかえれば、これは明らかに思想的性格を担った行動です。道路交通法のように、一般に歩行者の自由を妨げる行為として裁かれるものであるとは思いません。憲法違反をしている政府を、自分自身の責任で告発する権利が日本の個人にあるかどうかの問題が問われているものと思います。(中略)

戦後の日本憲法と憲法につらなる制度は、反戦平和主義に徹するものですが、それを運用している人たちは、戦前の軍国主義の中で教育され、それがあたりまえとなったと反射をもった人たちなのです。このため運用の過程においては戦後の憲法を持っているにもかかわらず戦前的性格がこくなっていると思います。それで、いたるところで戦後の状況の中で育っている若い人たちは今の政治の担当者たちにたいして、これは大学を含めて、ことさらに反対の態度をとっているのは、ある意味では当然のことと思います。私は虚心に今の憲法を読めば、今の政府を担当している人たちの意識よりも、今の若い人達の意識の側に戦後の憲法があるものと考えています(小泉ほか 2017, 77-87頁)。

以上見事な弁護であったと思われる。付言すれば、鶴見の哲学とは何か、うかがい出来るような弁論ではないかとも思う。

Ⅲ 小田実とのつながり

「鶴見俊輔年譜」(小泉 2017, 126-7)にはこう記されている。

1965年、米軍によるベトナム北爆を機に、「ベトナムに平和を！市民連合(ベ平連)」を小田実、高島通敏らと発足させる。米兵に軍隊からの脱走を呼びかけたことに対して、67年10月、横須賀の米空母イントレピッド号から4人の水平が脱走し、これをきっかけに脱走兵援助組織「ジャテック」の活動を始める。

これでわかるように、ベ平連を中心として、鶴見と小田のつながりは非常に

強いきずなどで結ばれていたことが予想できる。それでは小田実とは何者であるのか、鶴見と小田はいかなるつながりがあるのか、まずは鶴見の「スタイル」と題する好文章から覗いてみたい。

鶴見は言う。小田実が、これから先に、何を残すか。よくわからないままに、それを考えてゆきたい。彼は、ベ平連という大きな運動をつくった。どの組織を受け継いだのでもなく、どこから資金の調達を受けたのでもなく、壮大な理論体系をつくったのでもなく。彼は、1965年の日本という状況に、彼のスタイルで訴えた。それは、1965年のヴェトナムに対して、アメリカ合衆国が攻撃を仕掛けるという状況、そのアメリカに日本国が協力するという状況に対する彼の姿勢だった。スタイル、大西洋横断飛行のリンダバーク。サイレント映画のチャップリン。米国全土、やがて世界に訴えるその二人に似たものを彼はもっていた。日本の近代史の中では、江戸時代の越境者万次郎に似ている（鶴見2013, 14）。

小田実もまた、そのように、13歳の彼を圧倒的軍事力によって追いつめた米国、戦後の窮乏にあって食料を与えて生きる条件をととのえた米国に対して、対等の人間として立った。そのスタイルが、ひれ伏す姿勢をとる今の日本政府要人から小田実を区別する（同, 16）。

小田実は、東大卒業、ハーヴァード大学留学だから英語はできたが、彼の数ある著作の中で私（鶴見）は、彼が開高健と共に書いた『世界カタコト辞典』が好きである。この本を支えるのは、今日の世界語は型の崩れた英語であるという信念だ。この本は彼が、現代の万次郎と呼ぶにふさわしい人であることを示す（同）。

以上の文は、小田実の追悼文集の巻頭言として書かれたものであるが、評者（土倉）の率直な私見として、鶴見の文はかなり奇抜な追悼文である。そこが、鶴見のキャラであり、あの状況ではああ書くしかなかったことを斟酌するとしても、である。おそらく天国の小田実は、苦笑しつつもたまげたに違いない。

巻頭言の次に掲載されている加藤周一の「呼びかけ人」と題する追悼文のほうはるかにオーソドックスである。加藤と鶴見の3歳の年齢の差、と言うべ

きか？ その一部を引用する。

「私的な小田さんは実に誠実な人でした。例えば学生のころ、小説の草稿を当時の新進作家・中村真一郎に送って中村から対等の扱いを受けたということ、何十年も生涯を通じて覚えていました。公的な小田実は驚くべき「呼びかけ人」でした。というよりも、今も我々に呼びかけています。ベ平連の平和活動、阪神地震災害の救援の為の市民運動、そして九条の会の呼びかけなどです。彼の呼びかけは格別の説得力をもっていました。弁舌をふるうばかりでなく自らデモの先頭に立つ。しかし同時にしゃべる必要があれば理路整然としゃべる。不言実行ではなくて有言実行です。そして小田は文学者でもありました。『アポジ』を踏む』や『玉砕』のような珠玉の名作があります。それとともに、社会における文学者の活動の全く新しい一つの型をつくりだし確立することによって、日本の文学史に大きな決定的な貢献をしました」(加藤 2013, 17-8)。

私見では、加藤の「小田は文学者でもありました」がポイントである。「行動する文学者」と言ったらよいだろうか。そこで、あらためて小田に関する鶴見言説をとりあげてみたい。1971年に書かれた小田の初期の小説や紀行文といった作品に寄せた鶴見の解説を紹介してみよう。

鶴見によれば、「小田実の作品を年代順に読んで見ると、この人には孫悟空が如意棒をもったという感じの時期が一度もなかったようである。13、4歳のころから小説を書いている早熟な少年にしては、異常なことである」(鶴見 1975, 469) と言う。

しかし、普通に考えて、鶴見の「孫悟空が如意棒」という例えの表現こそ、「異常」であり、奇抜である。結論を急げば、両者の個性のぶつかり合いのようなものがある。それは、さておき、鶴見は「孫悟空が如意棒」云々の理由を次のように説明する。

すなわち、「進化論が明治の少年をとらえ、資本論が大正の少年をとらえたような仕方、ある理論が小田実をとらえ、それで説明すると世界のすみずみまでが分かったという感じを彼が持つという時は一度もなかったらしい」(同, 469)。

だが、森鷗外や夏目漱石のような小説家が進化論にとらえられていたのか？ いやむしろ、漢文文化で育ったのではないか。たしかに、丸山眞男が「資本論が大正の少年をとらえた」例に当てはまるとしても、小田実には戦時期から戦後にわたって何か「如意棒」にあたる理論が持てたかという方が無理なのではないだろうか。開高健にしても、吉本隆明にしても、小田実と同じような環境ではなかったのではないか。

ただし、鶴見は、こうも言っていることが重要である。すなわち、「いかなる地上の国をも理想化せず、へこんだ地面から文明を見るという習慣は、小田が、もっと早く、大阪で空襲にあって大人たちとともに逃げまわった時の感じに根ざしているのだろう（同、469）。

小田が小説を書き始めたのは、日本が敗戦後、小田が、1年間、肺結核で学校を休んだ中学1年生の頃である。鶴見はこう書いている。

小田がはじめて出会った文学雑誌が『近代文学』創刊号で、そこで印象にのこった作品が埴谷雄高の『死霊』であり、その後に感銘をうけた作品が中村真一郎の『シオンの娘たち』であったりしたので、彼の理想とする文体は、自然にペダンティックなものとなった。初期の彼の作品、とくに『明後日の手記』を読むと、T・S エリオットやジョイスやマルローやサルトルやケケロやバビットまで出て来て、めくるめく引用文が、こどもの焼跡体験や大阪の闇市とはちがう場所に読者をつれてゆく。よく見ると、『明後日の手記』にも、次の作『わが人生の時』にも、焼跡のこと、戦争責任、在日朝鮮人のこと、その後の彼の仕事の主題になったものはほとんどそこにすでにあるのだが、西欧的教養主義の文体にかくされて、まだよく見えない（470）。

鶴見と小田の違いは、著述家としてのスタートの仕方に始まるのではないか？ 前者の場合は、ハーヴァード大学留学であり、後者は、大阪の焼跡、闇市である。しかしながら、両者にとっての共通点もある。それが重要だと思う。両者に共通するものは何か。それは広い意味での「戦争体験」と、時期は異なるとしても「アメリカ留学」ではないか。

さて、鶴見の小田論に戻る。鶴見によれば、小田にとって、小田の教養ある

文体は、作者にとってじゃまになりはじめた。やがて、世界を1日1ドル旅行して歩くなかで、アジアのどこかで彼は、この文体をぬぎすてる。こうしてうまれたのが、紀行『何でも見てやろう』で、その新しい文体のつくられたなりゆきは、開高健との共著『世界カタコト辞典』で解きあかされている。(中略)ここで彼の中にたくわえられた手づくりの普遍言語が、その後、日本に帰ってから彼の書いた『何でも見てやろう』の日本語のうらにある。それは日本語であっても、普遍言語の一部なのだ。やがてこの普遍言語の一部として、日本語だけでなく、英語やフランス語が使われはじめる時、それはざくしゃくした翻訳調から自由な、ベ平連の言語がうまれた。長編小説『アメリカ』は、このようにして既に獲得された小田流の普遍言語で書かれた(470-1)。

ここで、「普遍言語」について、鶴見は、日本人の欧米諸国の「劣等感」を問題にする。鶴見によれば、劣等感とは、ヨーロッパ諸国に追いつこうと努力していた明治時代の森鷗外・夏目漱石・永井荷風の小説よりも、日本がヨーロッパ諸国をすでに追いこしていると虚勢をはっていた昭和はじめの時代の小説に著しい。この時期に書かれた横光利一の長編小説『旅愁』は、小田実の『アメリカ』と見事な対照をなしている(471)。

鶴見によれば、『アメリカ』は、『何でも見てやろう』の執筆によって作者が新しく手に入れた方法で描かれた。(中略)『泥の世界』も『アメリカ』とおなじく日米小説で、同時に世界小説の系譜にぞくする。『アメリカ』が、日本人がアメリカに留学したことを描くのたいして、『泥の世界』は日本にもどって来た日本人の日常生活の中にどのようにアメリカが入っているかを描く。というよりは、どのように日本人もアメリカ人ももろともに泥の中にいるかを描く(472)。

鶴見は言う。この小説にくらべれば、『アメリカ』ははるかに論理的な構成をもっており、明晰である。だが、『泥の世界』は、戦争体験をもった年齢のものがよむと自己嫌悪を感じるほど、われわれの世界の内面にふみこんでいる。よく知られるということは、あまり気持のよいものではない。同じ女と関係をもつ複数の男という主題は、『わが人生の時』以来、『アメリカ』でも『泥の世

界』でもとりあげられるが、同種の関係にたいしてはじめは克服できなかった主人公の嫌悪と絶望は、しだいにゆるめられてきて、『泥の世界』にいたっては静かな連帯の情緒をつくりだす(473)。

鶴見は、泥の中に生きることを自分の日常と考えるひとにとっては、ある時に急に棒をのんだように硬直して他人に号令したり、他人からの号令を聞くことは無理である。数千人にとりかこまれても、自分のふだんの肉声をうしなうことなく話しつづける小田実のめずらしい能力は、ここに根ざしている。反戦運動の集会での彼の呼びかけは、『明後日の手記』、『わが人生の時』以前の彼の少年時代の詩からそれほどへだたってはいない(473)と、鶴見の小田実論を締めくくる。

一言で言えば、大変懐の深い小田論である。と同時に二人の相違を感じる。それは、小田は行動の人であり、鶴見は思索の人であるという原質によるものであろうか。

「小田は行動の人であり」にそって、小田論をもう少し考えてみたい。その前提として、すでに本稿に引用した箇所を再度引用するのは気が引けるのだが、前述した鶴見の言説をもう一度そうさせていたいただきたい。鶴見はこう言っている。

「自分を無力な状態にして、権力に対して抗議するのは、無駄なようにも思え、矛盾を含んでいるようにも思える。たしかにそうだ。他にもっと有効な抗議の仕方をさがさなくてはならない。それにしても、他の有効な方法が、地位を利用することであったり、有名人を利用することであったりすると、批判する相手の国家権力をもっと金があり、大きな組織があり、もっと地位と名声をもっているのだから、こちら側の有効性をうわまわる有効性をいつも、むこうがもっており、抗議することは無駄というふうにも考えられる」(鶴見 1981, 3; 同 2017, 122)。

さて、歴史学者和田春樹は、鶴見が巻頭言を書いた小田実の追悼文集に、「74年9月の集会のこと」と題する一文を寄せている。その一部分を簡単に紹介したい。

和田は言う。「小田さんと一緒に運動するようになったのは、韓国民主化の問題で、である。1974年春韓国で民青学連事件の大弾圧があった。韓国の詩人金芝河が学生たちの背後操縦者の一人として逮捕され、私たちを驚かせた。当時私は生まれたばかりの日韓連帯連絡会議の事務局長をしていて、当然にこの事態に取り組んだ。そこで小田さんと一緒になったのである」(和田 2013, 162)。

和田は続ける。「小田さんは、1972年、『蜚語』で逮捕された金芝河氏を支援するために、鶴見俊輔、中井(宮田)稔栄氏らと動いたことがあった。だから、小田実さんの動きはすばやかだった。まず、大江健三郎氏らとともに知識人の声明を出した。この最初の声明にチョムスキー、サルトルとポーヴォワールの署名をえたのは、小田さんが進めたことだった。小田さんの国境を越える姿勢が大きな意味をもった」(同, 162)。筆者として短く付言すれば、小田の姿勢を表す言葉として、和田のいう「国境を越える姿勢」と鶴見のいう「普遍言語」は共通する意味をもっていると思われる。和田によれば、1974年7月9日、金芝河ら7人に死刑の求刑が出た。翌日、小田実、大江健三郎、鶴見俊輔、中井(宮田)稔栄、真継伸彦、日高六郎、青地農らが集った。これが死刑の判決になると、作家たちは数寄屋橋公園でハンストをはじめた。小田実是世界同時行動を提案し、それを実現するために働いた。これは「小田さんしかできないことであった」(162-3)。

1974年8月8日には金芝河らをたすける国際委員会訪韓団が17,000人の署名簿をもって羽田を出発した。日高六郎団長のこの団にアメリカからノーベル賞受賞化学者ジョージ・ウォールドが加わった。彼を口説いたのが小田だった(163)。小田は、この日、もうひとつ、日本国内で運動の統一を作り出すという重要な提案をした。そのことで小田の意を受けて働いたのが和田春樹だった。小田は、社会党、共産党、公明党の党首に直接電話をかけ、一緒に会うことを約束させた。8月8日の午後、ホテルグランドパレスで、成田知己社会党委員長、宮本顕治共産党委員長、竹入義勝公明党委員長と青地農日韓連絡会議代表と小田実の5者会談が開かれた。5者は小田の書いた共同声明にサインをし、

全政治犯の釈放、対韓援助の根本的再検討の要求、共同活動の第1歩としての集会とデモをやることで合意した。小田と青地の代理としてその集会を準備する折衝は和田に託された。社会党と共産党の国民運動の責任者と困難な協議を行った末に、1974年9月19日、明治公園で国民大集会が開催された。約3万人のデモ隊の先頭を3頭首と小田、青地が歩いた。和田に言わせれば、「後にも先にもこのような組み合わせの行動はなされたことはない。それはひとえに小田さんの存在と熱意が可能にしたことであった」(同)。今や、与党となった公明党に昔日の観はない。今にして思えば、小田は政治的によくやったのではないだろうか。換言すれば、鶴見と違って、政治家たちを向こうに回して「有効な方法」を巧みに行使したのではないだろうか。

それでは、小田と和田のつながりは、どうなのだろうか？ 和田は、後で詳述するが、「アジア女性基金」運動の中心的な推進者であった。鶴見も「アジア女性基金」の呼びかけ人の一人だった。しかし、筆者の知る範囲では、小田は「アジア女性基金」の呼びかけ人には名を連ねていない。しかしながら、小田の韓国の人たちに対する親愛は、鶴見の暖かい心情以上のものがある。

以上の前提で、小田実の追悼文集に和田が書いた「74年9月の集会のこと」と題する一文の末尾に気になる箇所がある。すなわち、小田の葬儀に参加して、和田は、志位委員長以下の共産党の人々、福島委員長以下の社民党の人々の顔をみた。(中略) 和田は小田が実現した1974年9月の集会のことを思い出していた。2007年4月に、和田は小田から最後の手紙をもらって、返事を書くのが苦しかった、と言う。小田が最後まで心に掛けていた朝鮮半島の人々とわれわれ日本人の関係について、希望の光が見えなかったからである(和田 2013, 163-4)。

小田は最後の手紙で、和田に何を書いたのか？ 興味があるところである。ついでに言えば、鶴見、小田、和田の政治思考と行動はそれぞれ違う。3者の違いについて分析することは、本稿の主旨から離れる。とはいえ、鶴見を論じることが本論であることは忘れないで、小田の政治観の一面を記した、小田の幼馴染でアメリカ在住の画家・作家である米谷ふみ子の小田追悼集に載せられ

た一文「世界的英雄，近所の洩垂れ小僧」（米谷，2013）から一部分引用することは許されるだろう。

米谷はこう書いている。すなわち，神戸の地震のすぐ後だったかに，こちらの友達から電話があって，（中略）「米谷さん，小田さんの友達でしょ。電話を掛けて，小田さんに是非兵庫県の知事になって欲しいと頼んでくれませんか？」という。仕方なく米谷は小田に電話をしてその旨を伝えた。すると小田は「僕はなあ，石原慎太郎みたいな馬鹿ちゃうわい！誰が政治家みたいなもんになりたいねん！」と大声で怒鳴った。（中略）あの時大変な努力をして自然災害の生活再建支援法を通そうと政治家や役人とやりとりしていて頭に来ていたのだろう（米谷 2013, 70-1）。小田は政治家になろうとはしない。石原慎太郎とは合わない。そこは鶴見と共通する。しかし，小田は行動の人であった。

このあたりで，小田の政治活動の本領とも言えるべ平連に入って行きたいが，上記の記述に関連させて言えば，小田は1968年1月の佐世保における「エンタープライズ」寄港反対行動について記した一文において，次のように述べていることを発見したので，記しておきたい。小田によれば，佐世保における，1968年1月17日の夜の集会で，公明党の矢野書記長は，公明党が「エンタープライズ」寄港に強く反対し，公明党としてはじめての院外活動に踏み切った理由として，次の4つをあげたという。第1に，それがベトナム戦争への直接の負担を意味すること。第2に核兵器の持ち込みが行なわれること。第3には，安全性に疑念があること。第4に，政府はこれによって国民の「核アレルギー」解消をめざし，核武装をふくむ本格的な再軍備に突き進もうとしていること——（小田 2000, 282）。

しかし，このように矢野に敬意をささげるだけに終わらないのが小田の真髓である。小田は次のように述べた。「私は矢野書記長に同意し，自分自身の反対理由として，さらにつけ加える。『エンタープライズ』寄港は，日本国民に対してまっこうから加えられた侮辱であったからだ，と。いや，もう一つ付け加えよう。それは『物』による『人間』の侮辱だった，と。侮辱に耐えられなかった多くの人々が，佐世保をはじめとして，日本の各地で反対に動いたのだ

ろう。まぎれもなく、私もその一人だった」(同)。加藤周一の言うように「小田は文学者でもありました」という小田のキャラがここにも出ている。

ここで、「ベ平連」の問題に入る前に、もうひとつ、鶴見の回想文「金芝河 1941～：非暴力を貫いた反体制詩人」(鶴見 2002, 213-30)を紹介したい。鶴見の金芝河会見は、ベ平連以後であるが、行論の都合でそうなったことを、あらかじめお断りしておきたい。鶴見の回想は次のように始まる。

前後して2つの電話がかかってきた。ひとつは、アムネステイー日本から。もうひとつはベ平連から、ということは小田実から。韓国の詩人金芝河が逮捕監禁されている。彼の自由を求める署名を集めて、韓国にもつていってくれという、同じ趣旨の2つの電話だった。私(鶴見)は承諾した。(中略)1972年6月には、金芝河の詩はまだ日本語訳でひろく読まれていたとはいえない。やがて、彼の詩を日本語訳で読み、刊行を進めていた中央公論社の中井稔栄(上記)をとおして、彼の略歴を知ることができた。

新たな夜明けの裏通りで
きみの名を書く 民主主義よ
ぼくの頭はきみに見放されて久しく
ぼくの足どりはとっくにきみを見失ったが
ただ一途の
燃えつる記憶がひとつかわいた胸奥にあって
きみの名を
人目を避けて書く 民主主義よ
(「燃えつる喉のかわきでもって」姜晶中訳)

「民主主義」という言葉を口にするときの、韓国と日本での体温の差が私をとらえた。この言葉は、日本語ではすでに初々しさを失っている(鶴見 2002, 213-4)。鶴見の回想を続けよう。この時期に、中井稔栄をとおして出合った金芝河の詩、戯曲、評論の日本語訳は、一種の地下出版として、鶴見たちあいだ

で力をもった（同、215）。

1972年6月29日、鶴見と小説家真継伸彦は、詩人金芝河釈放を求める署名とともに、韓国に渡った。（中略）日本でもらったカトリック教会からの紹介状を頼りに、ハンガリー人神父を訪ねた。彼はつよい反共の信念を持っており、（中略）韓国で今おこなわれている弾圧についても強く反対しており、金芝河に会う手順を教えてくれた。（中略）数日前、ある人が金芝河をたずねてきて外に連れ出したので、韓国の秘密情報部は病院を責めた。病院はそのために神経をとがらせていた。（中略）やがて事務員が出てきて、鶴見たちが彼の病院に行くことを許した。

（中略）1941年2月4日生まれの金芝河は、その当時31歳。韓国解放の年には3歳で、日本語を知らない。鶴見たち3人は、韓国語を知らない（215-7）。

「あなたの投獄に反対する署名がここに 있습니다。私たちは日本から来ましたが、これは、世界のさまざまところからよせられた声です」。これに対して彼はゆっくりと答えた。（中略）。「あなたがたの運動は私を助けることはできない。しかし、私は、あなたがたの運動を助けるために、私の声をそれに加えよう」（217-8）。

それに対して、鶴見は次のように思ったと言う。すなわち、もし鶴見が同じ境遇におかれて、そこに見知らぬ外国人が入ってきて同じことを言ったとすると、鶴見には、「ありがとう」という以上のことが言えるだろうか。とっさの間に、自分のなかにある単純な英語を組み合わせて、これほど品格のある文章をつくる。ここに詩人がいた（218）と感嘆した。いかにも鶴見らしい金芝河へのオマージュである。このあたりで、鶴見の金芝河訪問記は切り上げるが、よくわかるのは鶴見の韓国の人たちに対する暖かい心情である。

さて、鶴見と小田のつながりにおいて重要な「ベ平連」の問題に入って行きたい。小田は著書『「ベ平連」・回顧録でない回顧』の第1章「私は“私たち”になった」の冒頭を次のように書き始める。

あのとき、鶴見さん—鶴見俊輔さんが私に電話して来なかったら、という気が私にはする。1965年の4月に入ってまださして日数が経っていないころだっ

たと思う。たまたまそのころはまだ生きていた大阪の父親のところにいる私に鶴見さんが自分で電話をかけて来て、ベトナム戦争反対の行動をしないかともちかけた。(中略)たいしてびっくりしなかったのは、その年のはじめあたりから、そして、ことに2月の「北爆」の開始のときから、ベトナム戦争と戦争に対する荷担が日本でも大きく取沙汰されるようになっていたからである。(中略)雑誌『世界』も、戦争にかかわっての「臨時増刊」を3月に出していて、私自身もそこに「いま何を成すべきか」と題した文章を書いていた(小田 1995, 21-2)。

そこで、小田の「いま何を成すべきか」を筆者(土倉)なりに要約して紹介することにする。ベ平連にかかわる前の小田の、ベトナム戦争反対の行動の姿勢がよく分かるからである。

小田によれば、解決はただ一つ、アメリカがベトナムから手を引くこと以外にはない。ただ、小田はアメリカの政治家ではないから、一人の日本の市民として、問題を、その解決にまで、どのようにしてアメリカの政治を至らせるか、というふうを考える。(中略)「日米文化交流」、「日米知的交流」といったことが長年言われて来た。(中略)それならどうして、ベトナム問題解決へむかって、日米の市民が共同戦線を展開するというようなことができないのか。文化交流、知的交流の第1歩は、まず、そのこと——文化を破壊しようとするもの、知性の敵に対して共同戦線をはることにあるだろう。たとえ、その敵が自分の陣営にぞくするものであっても。どうして、たとえば日本の大新聞がニューヨーク・タイムズと共同キャンペーンをやらないのか。日本の総合雑誌がアメリカのそれと手を組まないのか。さまざまな知的交流機関が動き出さないのか。東京とワシントンの双方で、統一スローガンをかけたデモが行われないのか(小田 2000, 231)。

小田はこう締めくくる。「すでに、さまざまところでさまざまな人がキャンペーンをやり出している。私たちはそれを拡大して行かなければならないと思う。海を越えてまで、そうしなければならぬと考えている(232)。

さて、小田の「私は“私たち”になった」言説に戻りたい。小田はこう述べ

る。「かんじんなことは、鶴見さんの言い方で言えば、多くの人々のなかで、この年の『3月から4月にかけて、電話をかけるとすぐ話がきまるほどに米国のベトナム爆撃に対する反対の機運が熟していた』ことである。(中略)その実感は私にもある」(小田 1995, 24)。つまり、小田が「何かしなければ」という気になっているタイミングに、鶴見が電話をかけたわけである。見事なアンサンプルというべきなのだろうか。

ひとつだけ、小田の回想を追加しよう。小田はこう書いた。はっきりおぼえているのは、鶴見たちの話を聞いて、「『ベトナムに平和を!』市民連合」という名前を小田が考え出したことである。テーブルの上の紙ナプキンをとって、小田はそう書いた。高島通敏がそれを見て「略して『ベ平連』だな」と言った。小田は奇妙な略称だと思った。この2つのことをはっきり覚えている、と小田は言う(同, 25)。

1969年11月、小田実編『ベ平連』という書が刊行される。編者は小田だが、「はじめに」は鶴見が書いている。それにあたってみよう。鶴見は次のように述べる。

「ベ平連の牧歌時代は終わった」というのは、武藤一羊の名言だ。(中略)5年前、小田実の演説と、「平和のまんなかでくらすのが、それが1番だ」という歌と一緒に、赤や青の風船をもって清水谷公園から東京駅八重洲口までのどかに歩いたところから見ると、いくつかの点で、今のベ平連はちがっている。その一つには、ベ平連に対する弾圧がはじまったということであり、自分はベ平連だと言っても、それで逮捕をまぬがれ得る保証が今ではなくなったということである。今年(1969年)の10月10日の統一行動では、東京の逮捕者70名のうち30名がベ平連。翌日ベ平連ニュース編集長の遠藤洋一宅とベ平連事務所が家宅搜索された。もう一つは、(中略)ベ平連の活動の中で、完全に誰に対してもあけひろげのところの他に、自分たちが信頼できる(と考える)仲間だけで相談して決めるところが出て来たことである。(中略)この公開性と非公開性とがどういう仕方で結びついてゆくかが、ベ平連の運動上の難問になっている(鶴見 1969a, 3-4)。

ここには、鶴見や小田のリーダーとしての使命感と苦悩のようなものがよく出ていていると思う。すなわち、市民運動から政治運動へのやむを得ないというか、成り行きとして必然的な変容への、組織の問題も含め、対処して行かねばならないという難問と言ったらよいのだろうか。

さて、ベ平連の発起人である鶴見俊輔、高島通敏、小田実は、周知のとおり、アメリカ留学の経験の持ち主であることが、ベ平連の目的、行動において重要な意味を持っている。ここでは、1968年8月11日-13日のベ平連主催の「反戦と変革に関する国際会議」についての鶴見の「感想」をもとに、話を進めて行きたい。

鶴見によれば、ベ平連は、黒人の反戦活動家にも、この国際会議への出席のさそいをかけ、旅費の調達にも努力した。また、アメリカのさまざまな平和運動のグループに呼びかけて、旅費自弁で来てもらうことにした。フランス、オーストラリアなどの場合も、同じである。日本側の出席者は、全国にベ平連のグループが180できているので、それらから中心的なはたらき手を送ってもらうようにたのみ、さらにベ平連以外のところで、ベトナム反戦運動を進めている団体の活動家にも、個人として呼びかけた。(中略) 会議の出席者は、日本人219人、外国からは5カ国で37人。傍聴者は、300人ほどだった(鶴見1969b, 85-6)。

鶴見の「感想」の、次のエピソードは面白い。鶴見によれば、もともと、一昨年(1966年)の日米市民会議に続く2度目の会議をすることは、ベ平連にとっての懸案だったのだが、目前のことにおわれて、この会議のための資金の準備がなかった。資金あつめの時にいつも主力になってきた代表の小田実は、日本をはなれており、そのころ、チェコで行き倒れになり、金もなく病気になって見知らぬ日本人の下宿で介抱をうけているということだった。代表が行き倒れになった話は、ベ平連のたよりなさとともに、その自主性をあらわしている。日本社会党、共産党の委員長が、ヨーロッパで行き倒れになるなどということは考えられないだろう。誰か随行しているだろうし、金ももっているだろう。しかし、ベ平連の代表の場合には、もともと世界無銭旅行から出発した人なの

だし、これであたりまえなのだ。彼が、ひろく名の知れた人となり、また収入のある人になった今も、いつでも、ふりだしにもどって再出発できる精神をもっているということが、彼の魅力をつくっている（同、87）。

鶴見がこう釈明していることも重要であろう。お金の話になるが、鶴見によれば、代表が行き倒れになったことからわかるように、ベ平連には、定期的に大きな資金の入る道がない。しかし、この4年間、いつも、参加者が自分でかせいだお金を出すことでやって来た。1966年の日米市民会議のあとで、「ベ平連の黒い霧」ということが既成事実のように言われているのをきいて、びっくりしたが、私たちのように、自分たちでかせいだ金を運動に入れることをあたり前のことと思っているものにとってベ平連の歴史に資金面で黒い霧のようなものなかったことは、別に説明を必要としない（88）。

長々と引用してきたが、短く、筆者の私見を書くとしたら、鶴見と小田は、政治運動や組織について、なんと大らかな、包容力のようなものがあるのだなあと感嘆する。と同時に、政治運動や組織は、本来、そういう好い加減なものではなかったのではないかとも思う。よく考えてみたい。ただ、俗見であるが、鶴見や小田の旺盛な執筆活動は、「自分たちでかせいだ金を運動に入れる」ことも、執筆の契機として作用していたのではないか、と思わないでもない。

そこで、やや組織論的な話になる。鶴見によれば、ベ平連とは何かというのは、ベ平連にとってよくわからないことだ、と言う。すなわち、この集団は、今日では全国いたるところで個人参加の方法でつくられ、ベトナム戦争に反対のものがあつまってすぐそこで「ベ平連」と名のことになる。そこに集まって、ベトナム反戦のために歩くか話すかしたものが、ベ平連なので、それ以外にベ平連はない。東京に連絡事務所があるが、その中央の指令にしたがわなくてはならないという規律があるわけではない。ここから給料をもらっているものは、一人もいない。全体を一つのものに保つ上で大きな役割を果たしているのは、代表としての小田実の姿である。これは、他の政治団体では考えられないほど大きい。この点では、ベ平連は、むしろ目玉の松ちゃんなどを中心として集まった大正時代のファンの会に似ているかも知れない（91）。

筆者には、少し違和感があるので書き留めておきたい。まず、大正時代のファンの会のことはよく知らないのであるが、筆者の世代で言えば、例えば、「渥美清の会」のようなものはあったのだろうか？ なかったと思うのだが、それは置いておくとしても、ベ平連を「松ちゃんのファンの会に似ている」というのは、小田実に失礼ではないかと思う。もちろん、鶴見流のレトリックであり、小田実自身も、苦笑どころか大笑いするだけだと思っただけでも。次に、こちらの方が重要であろうが、今日では、政党は代表者の顔が大きくものをいう時代である。例えば、安倍晋三の自民党、志位和夫の共産党のように。彼らの存在感は、鶴見説の「他の政治団体では考えられないほど大きい」とは逆の例になっている。

IV 韓国慰安婦問題と鶴見俊輔

社会学者小熊英二は、同じく社会学者の上野千鶴子とともに、鶴見俊輔に聞く、鼎談形式の書（鶴見，2004）の「まえがき」において次のように述べている。

周知のように、鶴見氏は日本にプラグマティズムを紹介した哲学者であるばかりでなく、『思想の科学』の編集や『転向』の共同研究の中核を担った。また丸山眞男・竹内好・吉本隆明など著名な知識人とも交流が深く、60年安保闘争やベ平連にもかかわった。さらに戦中には、海軍軍属として軍の慰安所設置に関係し、90年代には、「従軍慰安婦」への補償を行う「女性のためのアジア平和国民基金」へも参加している（鶴見 2004, 7）。

さて、小熊は、鼎談の中で次のように発言する。

小熊 少し話を変えて、「女性のためのアジア平和国民基金」（以下「国民基金」と略記）のことについてうかがいたいと思うんです（鶴見 2004, 76）。

ここで、「女性のためのアジア平和国民基金」の略記について筆者（土倉）は一言したい。以下の本稿では、小熊たちが使用する「国民基金」という略記は、和田春樹が使用している「アジア女性基金」という略記に改めたい。以下、小熊の話が続ける。

小熊 1991年に金学順さんの告発があり、1993年に日本政府が慰安所開設に対する日本軍の関与を認めて、1995年に戦後50年の国会決議がなされた。それと並行して、「慰安婦」への「日本国民による償い」という名目で、政府のバックアップによる「アジア女性基金」が設立された。この「アジア女性基金」には、国際法学者の大沼保昭さんや、ロシア史研究者の和田春樹さん、朝鮮史研究者の高崎宗司さんなど、日本で長いあいだ韓国や北朝鮮との友好や民主化運動支援、さらに在日の権利の問題などに取り組んでこられた方々が参加された。しかし、同時に、「アジア女性基金」は日本政府が公式の補償と謝罪を行なわないために設けたものだという批判を日本国内でも受けましたし、元「慰安婦」の女性たちからも支給金の受け取りを拒否されるという事態を招きました。そうしてアジア女性基金の呼びかけ人から三木睦子さんが脱退されたり、和田さんのような日韓親善に尽くしてこられた方が批判にさらされたりという事態も起きたわけです。(中略) この問題をいまどう考えておられるのか、ぜひ聞いておきたいのですが。

鶴見 私個人の感情から言えば、できれば日本の国家がはっきり関与を認めて賠償すべきだと思います。だからそうした国家賠償をできるところまで、アジア女性基金の成立からずっと慎重に押していくべきだったでしょうね。

鶴見 アジア女性基金のことでいえば、お金を集めることはできたけれど、渡す段階で受取り拒否が出てしまった。渡すことのむずかしさを、和田も大沼も、私も予測していなかった。それは誤算だった。

鶴見 女性のほうで、どうしても日本国家からの賠償でなければ受け取らないという方がいた場合には、私はそれはそれで認めて、他の方に渡していけばいいんじゃないかと思っていたんです。だけど、あそこまで拒否が広がって、問題がこじれるとは予測していなかった。

上野 それを予測していなかったというのは、この問題に関わる日韓の運動の状況を、あまりご存じなかったからではないでしょうか。(中略)

鶴見 一つにはね、その前のサハリンが、うまくいきすぎたんですよ。戦前に日本領だったサハリンに連れてこられて、敗戦後に残留させられることに

なった朝鮮人の引揚が、冷戦の終結によって可能になった。そのとき大沼保昭と原文兵衛さんが動いて、日本政府と韓国政府の調整をうまくやれたんです。アジア女性基金のときに、私に声をかけてきたのは和田と大沼だったんですが、サハリンのケースと同様に行けると思った。

上野 たとえば韓国の元「慰安婦」の女性たちが中心になった日本大使館前の水曜定例デモは、10年以上前から始まって、いまでも続いています。(中略)あの方たちも、きちんと日本政府に謝罪と賠償をしてもらって、もう許したいと願ってらっしゃると思うんです。そういう方々してみれば、鶴見さんに「私はサンドバッグになります」と言われても…。

鶴見 いや、それはそうです。

小熊 上野さん、まあそのあたりでちょっと…。

小熊 私はアジア女性基金が出て来たときに、最初に思ったのは、「これは日本政府の常套手段だな」ということだったんです。(中略)だから、アジア女性基金にしても、「やっぱり、外郭団体にやらせるかたちにしたか」というのが、関係して努力した方には申し訳ないですが、最初に思ったことでした。そのへんのことを、アジア女性基金に参加なさった方がたはどう考えておられたのでしょうか。

上野 そこが、和田さんや大沼さんの日本の保守政治の現実に対するリアリズムですよ。政府の公式賠償という形態は、とうてい望みえない。たとえ汚れ仕事を外郭団体にやらせるという形態ではあっても、これが保守政権下で引き出せる最大限の成果だろうと。それから95年当時は、名目的とはいえ社会党首相の村山政権でしたから、政権が交代して自民政権になったら、それすらもできなくなるという予測がありました。

小熊 私が思うに、個々の被害者は、いろんな意見があると思うんです。ご自分の老後の心配とか、一族にお金をのこしたいとかいうこともあるでしょうし、そもそも日本の敗戦から朝鮮戦争、さらにはその後も経済的な面もふくめてたいへん苦労してきた方々ですから、お金を欲しいと思っていらっしゃる方がいるのは無理もないことだと思う。

小熊 おそらく和田さんなどは、そうした被害者に少しでも償い金を渡そうということから、アジア女性基金を始められたんだと思います。また被害者のなかにも、アジア女性基金でもいいじゃないかと思う方もいるかもしれない。だけど、韓国内の政治状況が展開したら、個々の被害者の判断で受けとれる雰囲気ではなくなってしまうでしょう。これはもちろん、日本政府が正式に賠償すればそもそも発生しなかった問題ですから、韓国政治の転回を批判したいわけではない。しかしここで言いたいのは、そういう予測がアジア女性基金をつくったときにできなかったのだろうかということです。

上野 そういう展開を、日韓交流の面では日本で随一の専門家である和田さんが誤算したとなると、はたして誰に適切な判断ができたでしょうね。(中略)

小熊 私が思うには、冷戦終結後の90年代の展開が急激すぎたというものもあるのではないかと思います。そもそも88年の韓国の民主化までは、日本への戦後補償要求の運動は、民主化運動などと一緒に、韓国政府によって弾圧されていたわけです。元「慰安婦」の女性に対する注目も、けっして高くなかったし、生活に苦しんでいた人も多かったわけです。それが88年の民主化と、91年のソ連崩壊と並行して、91年に金学順さんの告発が出て来た。(中略)

鶴見 いまから考えれば、韓国なりフィリピンなり、地域ごとに事情を判断して展開していけばよかったと思います。韓国の場合でいえば、せつかく和田が70年代から金大中の人権問題に取り組んだり、長年にわたって日韓交流に努力してきたんだから、韓国政治の文脈でも別の通路をつくれたはずだった。

上野 そうですね。(中略) 私は和田さんを見ているとおかわいそうで、あれだけ長年にわたって日韓交流に努めてきた方なのに、日本でも韓国でも批判を浴びてしまった。和田さんに対する尊敬と同情から、アジア女性基金への関わりを引き受けたようなものです。

鶴見 いや実をいえば、私がアジア女性基金を脱会しなかった理由も、それだけなんです。途中で誤算だったとはわかったし、三木睦子さんみたいに脱会すれば、問題はなかったんだけど。和田や大沼とはベ平連と戦争裁判批判

以来の関係で、それから日韓問題でもずっと一緒にやってきたんだから、ここで自分が引き上げてしまったら私としての「ヤクザの仁義」に反する。

上野 戦後日本の、いわば最上の知性というか、良心的存在の一人である方が、これほど批判されて苦しまなければならない事業とは、いったい何だったんだろうかという思いがぬぐいきれません。

小熊 アジア女性基金が行き詰まれば、批判が和田さんなどに向かってしまうという事態は、日本政府としては予測できたことではないですが。直接の担当官などには、まじめな人もいたかもしれないけれど、組織としてはそういう論理で動いたとみなされても仕方がないと思います。

鶴見 私は放蕩少年の出身だけあって、和田や大沼よりもう少し、悪知恵があるんだけどなあ。彼らは村山政権のあいだに基金が実現すればチャンスだと思っただろうけど、政治の素人はそういうチャンスを活かせると思って、ミイラ取りがミイラになるんですよ。

上野 和田さんや大沼さんを政治の素人とおっしゃるんですか。

鶴見 母方の家系でいうと、私は政治家の4代目なんですよ。

上野 鶴見さんはアジア女性基金に関わりをもつにいたったご自身のお考えを、これまで説明してこられませんでしたね。(中略)その後、藤田省三さんが「自分は断固として鶴見を支持する」と書かれた文章は読まれましたか(鶴見 2004, 76-86)。

このあたりで、鶴見、上野、小熊の鼎談を離れ、鶴見が『『慰安婦』問題をめぐるさまざまな声』の章に寄稿した詩的な短文(鶴見 1998, 180-3)を紹介したい。

鶴見は言う。鶴見が生きているあいだにおこった戦争についても、かくされたという形がのこっている。戦争の中であった慰安施設についても、それがあったことがかくされて、戦史からはずされ、教科書にも出てこない期間が、ついこのあいだまでつづいた。それをあきらかにしたいと、鶴見は思った。鶴見が知っている事実はそれほど多くない。1944年9月、鶴見は、シンガポールから君川丸という輸送船にのった。(中略)その船底に、100人近い朝鮮人の慰

安婦がいて、日本におくりかえされる途中だった。この人たちと、おなじ船底で、2週間、起居をともした。なぜ、このひとたちがおくりかえされることになったのかは、わからない。この人たちが、どのようにしてあつめられたかも、わからない(同, 180-1)。

ジャカルタ在勤海軍武官府にいた1年半のあいだ、鶴見にあたえられた仕事は、「敵の読んでいる新聞とおなじものをつくれ」ということで、それは陸軍とちがって海軍に必要な情報だった。(中略)そのことから、シンガポールの海軍通信隊に呼ばれ、もと同じ仕事をするようになった。(中略)もともと、日本への送還途上にあるという身分は変更されることはなく、3ヶ月ほどの勤務の後に、今度は、輸送船団とかかわりなく練習巡洋艦「香椎」の船底で、1944年12月はじめに日本にもどった(181)。

おくれで民間基金の計画に賛同人としてくわわり、今はその位置にいる。朝鮮、台湾、占領地に日本国が強制力を用いて慰安施設をつくった事実を明らかにして謝罪するという基金の目的に賛成するからである(182)。

事実を明らかにするという目的についてはこの計画をつづけてゆきたい(同)。

つぐないの手続きについては、さまざまに困難に出会った。それを予想しなかったことについての不明を恥じる(182-3)。

植民地、占領地の住民の側にどのような心の動きがあるかについて、植民地と占領地をつくっている側には、感覚がにぶい。想像力がにぶい。このことの自己把握が足りない。日本国家は敗戦後も連続しているので、戦中にあったにぶさは今日も受けつがれて、私たちの中にある(183)。

当時慰安婦とされた人びとは今は高齢であり、その人びとにつぐないの意志がとどくためにはおそすぎてはいけない。その意志をとどける方法は、相手方によってちがううけとり方にあう。つぐないの意志をいつわりと感じて、謝金をことわるのはひとつの決断である。現在のその地域での政府をとおして、謝金が当事者につたわるというのもひとつの道がある。そのさまざまの道について、私たちの想像力が私たちの間にはたらいていなかった(同)。

謝意をつたえる企てが困難に出会ったことは、この計画のためによいことだった(同)。

はじめにかえり、慰安所設立の事実をたしかめることが必要だ。この計画が公的資金にもとづくものであることが、過去の政府の制度とくらべる道をつくりやすくする。そこに、権力側の自己弁護というねじまげの道に迷いこむ場合もあるが(同)。

さて、鶴見の言う「ミイラ取りがミイラになる」問題に少しこだわってみたい。

まず、歴史学者吉見義明の「『河野談話』と『慰安婦』制度の真相究明——何がどこまでわかったのか?」(吉見, 2013)論文にあたってみよう。

吉見によれば、「問題を解決するためにどうしたらいいのか考えたい」として、2007年12月13日に出された EU 議会の決議と河野談話を比較する。EU 議会は次の5つを指摘している(吉見 2013, 20)。

第1に、曖昧さのない明確な認知と謝罪を行なうこと。第2に、補償を行うための効果的な行政機構を整備すること。第3に、裁判所が賠償命令を下すための障害を除去する法的措置を国会が講じること。第4に、EU 議会決議は、事実を歪曲する言動に対して公的に否定すること、と声明している。第5に、史実を日本の現在と未来の世代に教育すること、というものであるが、河野談話はこれとほぼ同様の事柄を認めている。すなわち、河野談話は「われわれは、歴史研究こ、歴史教育を通じて、このような問題を永く記憶にとどめ、同じ過ちを決して繰り返さないという固い決意を改めて表明する」と、対内的にも、対外的にも約束している。ただし、これは非常に重要なことだが、実際には守られていない、と吉見は付言する。すなわち、日本では、現在、逆に、中学校の歴史教科書から「慰安婦」の記述が全部なくなってしまうという、河野談話の約束とは反対のことが進行していった(同, 20-1)。

吉見は最後に次のように述べて締めくくる。地味な結論である。すなわち、「結論として、欧州議会の決議が勧告しているように問題が解決されることをめざして、河野談話の積極的なところは維持し、不十分なところは改めていく

ことが求められている」(21)。

さて、歴史学者金富子によれば、日本社会で1990年代に少なくなかったアジア女性基金への批判は、2000年代に入ると影を潜めたと言う。しかし、アジア女性基金は、むしろ「和解」への道筋を困難にしたのではないか。和田が2012年になって「韓国と台湾においては和解にいたることに失敗した」と率直に総括したことがそれを物語っている(金 2013, 81)、と述べている。これについては、のちに検討することにして、金が次のように述べていることも重要である。

すなわち、驚くべきことに、その後、日韓「双方が誠意ある対話」を重ね、2012年前半に「日本の首相の心からの謝罪」「国のお金で償い」の線で「合意寸前だった」ことが明らかになった。これが事実なら、日本政府が「法的解決済み」論を乗り越えようとしたと解釈できなくもない。(中略)現状では「河野談話」の継承は不可欠である(同, 83)。金の言説には、まことに「歴史とは何か」を問う興味ある言説となっている。

ここまで書いてきて、原稿締め切り期限にいたった。「尻切れトンボ」とはこのことを言う。この続きは、残念ながら他日の別稿にゆだねることにする。

V おわりに

小田実の没後7年後に、小田・鶴見の共著という形式で刊行された、『オリジンから考える』(鶴見・小田, 2011)という兩名共著の著書がある。「小田実とは、現実の人生において、お世辞なしでのつきあいであり、そのつきあいを、亡くなった後も変えることなくこの本によって保てたと思う」と鶴見は「あとがき」(鶴見・小田2011, 260-1)に書いているその書に収められている「小田実との架空対談」という鶴見の書いた長い一文がある。いくつか抜粋して引用してみたい。

小田実は韓国籍をもつ在日の女性と結婚した。岳父は韓国人である。(中略)小田実の日本語はすぐに在日韓国人の岳父に通じた。二人は何度も何度もそれぞれの人生経験を語り合った。(中略)小田の小説『河』のはじまりは、1923

年、東京で迎えた関東大震災。主人公重夫は朝鮮人の父と日本人の母との間に生まれて日本国籍をもつ。(中略)『終らない旅』をしのぐ『河』3冊を、小田の死後に読みながら鶴見は思った。生きているうちに彼はどの革命党派にも入らなかったが、どこに移動しながらも、この大作を書き続けた。その努力が彼を殺した。その間、何の検査も治療も受けず。その重さが感じられる大作である(鶴見・小田2011, 24-7)。

小田は小さいころから大阪で在日朝鮮人と出会い、在日朝鮮人の市場に出入りし、その食べ物を食べていただろう。それは大阪育ちの自然の一部である。しかし、『河』の主人公は、6歳で小学校に入り、日本国の教科書を使い、日本人の先生から国史を教えられて、小国民の見る朝鮮を型通りに習った。だが著者の小田とちがって、『河』の主人公は、在日朝鮮人の息子として生まれ育ち、朝鮮人が受けるあざけりを日常に感じ、父とはぐれてから10代の少年として、(中略)朝鮮の旧都京城と平壤を訪ねる。こうして主人公は、これまでの日本小国民としての朝鮮史の教養を振りほどくことができた。主人公は日本国に対しての疑いと反感とのないまぜの感情を持つ少年となった(鶴見・小田 2011, 28-9)。

鶴見の小田への追悼はこのへんで終えたい。と同時に「非暴力直接行動と鶴見俊輔」と題した本稿の「おわりに」の文に代えさせていただくことにしたいのだが、一言だけ、釈明させていただく。たしかに、末尾の「小田実の小説論」は、「非暴力直接行動」論に論理的には繋がらないかもしれないが、次のように考えることによって、それほど支離滅裂になることは免れていると思われる。

第1に、鶴見が「アジア女性基金」に参加したのは、「ヤクザの仁義として」であるというのは誤解を招く表現であって、筆者(土倉)なりに表現すれば、「日韓民衆の連帯を目指す知識人の政治行動の一環」である。そして、それが本稿のテーマにも合うと思っている。

第2に、小田が「アジア女性基金」に参加しなかったのは、小田のひとつの原則なのかもしれない、と思ったりもする。鶴見が言うように「彼はどの革命

党派にも入らなかった」が、「アジア女性基金」も一つの「党派」（「組織」）ではなかっただろうか。ただし、彼の病気もあった。何よりも大作『河』3冊の執筆に集中したかったのではなかろうか。「ベ平連」の小田は文学者でもあった。

参考文献

- 安保拒否百人委員会（1981），『「遠い記憶としてではなく、今」——安保拒否委員会の10年——』，安保拒否百人委員会。
- 小田実（1995），「私は“私たち”になった」小田実，『「ベ平連」・回顧録でない回顧』，第三書館，21-36頁。
- 加藤周一（2013），「呼びかけ人」，藤原良雄編，『われわれの小田実』，藤原書店，17-8頁。
- 金富子（2013），『『国民基金』の失敗——日本政府の法的責任と植民地主義』，リサーチ・アクションセンター編，『「慰安婦」バッシングを越えて：「河野談話」と日本の責任』，大月書店，68-85頁。
- 黒川創（2018），『鶴見俊輔伝』，新潮社。
- 小泉英政ほか（2017），『なぜ非暴力直接行動に踏みだしたか』，編集グループ SURE。
- 柴田道子（1976），『谷間の底から』，岩波書店。
- 鶴見俊輔（1967），「大臣の民主主義と由比忠之進：焼身で訴えるということ……」，『朝日ジャーナル』，11月26日号，17-9頁。
- （1969a），「はじめに 牧歌時代以後」，小田実編『ベ平連とは何か：人間の原理に立って反戦の行動を』，徳間書店，3-7頁。
- （1969b），「日本とアメリカの対話——『反戦と変革に関する国際会議』の感想」，小田実編，同上書83-103頁。
- （1975），「小田実」，『鶴見俊輔著作集第2巻』，筑摩書房，469-73頁。
- （1981），「遠い記憶としてではなく」，安保拒否百人委員会，前掲書，3-4頁。
- （1998），「今の考え」，大沼保昭ほか編『「慰安婦」問題とアジア助成基金』，東信堂，180-3頁。
- （2013），「スタイル」，藤原良雄編，前掲書，14-6頁。
- （2002），『回想の人びと』，潮出版社。
- （2004），『戦争が遺したもの：鶴見俊輔に戦後世代が聞く』，新曜社。
- （2017），「遠い記憶としてではなく」，小泉英政ほか『なぜ非暴力直接行動に踏みだしたか』，編集グループ SURE，122-5頁。
- 鶴見俊輔・小田実（2011），『オリジンから考える』，岩波書店。
- 吉見義明（2013），『「河野談話」と『慰安婦』制度の真相究明——何がどこまでわかったのか？』，「戦争と女性への暴力」，リサーチ・アクションセンター編，『前掲書』，2-22頁。

- 米谷ふみ子 (2013), 「世界的英雄, 近所の洩垂れ小僧」, 藤原良雄編, 前掲書, 63-74頁。
和田春樹 (2013), 「74年9月の集会のこと」, 藤原良雄編, 前掲書, 162-4頁。